今週のみことば

「慈しみ深い神様」

（ヨナ書４章１～１１節）

「主は仰せられた。『あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜しんでいる。まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。』」（4:10~11）

仲森文穏

今日のメッセージ要旨

〇ヨナは、都の外に出て仮小屋をたて、町を監視し始めます。自分の正しさに固執し、神様の深い憐れみの心も、恵みの心も受け入れず、ニネベの滅びをなおも期待するヨナを見て、神様は悲しく思われ、一計を案じられました。何と忍耐強いことかと思います。一夜のうちに彼のために「とうごまの木」を備えられたのです。一日中日蔭ができてヨナは大いに喜びました。しかし木は一日で枯れたので、ヨナは悲しみ怒って言いました。「生きているよりも死ぬ方がましです」。ヨナの口癖なのか、３節にも出てきます。言葉上のことだとしても自分の命を軽んじる人に、他人の命の尊さが理解できるでしょうか。この口癖一つとっても、ヨナには他者への配慮が欠けているのではないかと思わされます。

そんなヨナの耳に、「お前は自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。それならば、どうしてわたしがこの大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と無数の家畜がいるのだから」という神様の声が響きます。「滅んでよい人などいないのだよ、ヨナ」と諭しておられるのです。

〇小さく弱いイスラエルが神様に選ばれたのは、神の救いは我々だけのものと誇るためではなく、神様の憐れみと恵みを、国境をこえ、民族の違いをこえて告げ知らせるためです。ユダヤ教の成立する時代、強烈な民族主義で人心をまとめようとしていたユダヤの風潮に、ヨナ書はそれでいいのかと問いかけます。今日、ハマス絶滅にやっきになりアラブの女性や子供たちの犠牲に目もくれないイスラエル上層部の人々に、もし声が届くなら、「ヨナ書を忘れていませんか」と言いたい思いです。もし声が届いて戦いをやめ、「我々はヨナ書を重んじる」とでも声明を出してくれたなら、世界中の人々がヨナ書を読み、慈しみ深い神様に出会えるに違いありません。

ヨハネ３：１６に「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」とあります。ここに証されているのは、世の人を愛し給う慈しみ深い神様です。ヨナ書は、旧約聖書の中で特別な存在感を持っています。ニネベの人々の悔い改めをこの上なく喜ばれる慈しみ深い神様を心に覚えましょう。そしてそのため用いられたヨナのように、私たちも慈しみ深い神様を証する器として用いられたく願うものであります。